

【編集後記】

本誌は私が企画を立て、創刊した雑誌であるが、思い返すのは学部の指導教官・竹村信治先生の姿である。竹村先生は『Problematique』という雑誌を創刊され、7巻＋別巻2号を発行された。誌名からもわかるように、問題領域を新しく見出し、その問題を切り開く先進性に重きを置いたものであり、注目された雑誌であった。また、こだわりのデザイン・表紙・紙が使用され、一見して手間や費用をかけたことがわかるものであり、私も四本投稿させていただいた。ほぼ一人で編集等をなさっておられ、なぜご多忙な中雑誌を作ろうかと思われたのだろうか、当時は疑問に思っていた。今はその理由がわかる気がする。私も論文を20年以上書くようになり、自分が追い求めている発表の場と雑誌の間に違和感を感じるが増え、そうした制約を取り払って自由に書いてみたいという気持ちが年々強くなってきたからである。

そうした際、村上研究フォーラムが発行している『MURAKAMI REVIEW』を読み、紙媒体ではなく Web 雑誌という手段の可能性を知り、その斬新な方法に目から鱗が落ちる思いがした。Web 雑誌の利点は、機関リポジトリ制度を使えば、誰でも気軽にダウンロードができるところにあるだろう。山口大学に赴任し、Web サイトを立ち上げることができ、機関リポジトリ制度も利用できるようになった。紙媒体ではないので、費用もかからないことも発刊する動機になった。また、本誌創刊の理由の一つに、画像や枚数制限についての制約が少ないことがある。拙稿ではイラストの比較のため画像を多く引用した。通常の紙媒体では制約があることが多いが、画像を多く引用することで自分の思いに近い形で論証ができた満足している。

創刊号はイラスト（「ふしぎな図書館」）・舞台（*after the quake*）、映画関係者（野村企画：山田哲夫氏）へのインタビュー、映画（「踊る小人」）に関する論考を掲載でき、村上春樹文学におけるアダプテーション研究という特色を出せたのではないかと考えている。また、今年度発行された村上春樹研究において重要だと考えられる書籍の書評を掲載することもできた。どの書評も通常よりも字数が多く、かなり熱い評もある。字数制限を設けなかった分、各人の思いが自由に書けたようである。しばらくは字数等の制限のない形での雑誌運営をしてみたい。

デザイン等にはあまりこだわりのないもので、簡素なものになっている。このあたりは竹村先生とは異なるなど感じるものの、自分で雑誌を作るという点は、先生の研究姿勢を少し受け継いだのではないかと感じてみいる。

（山根 由美恵）